

報 告

大学生による高校生への「性的自律教育 (Abstinence Education : A.E.)」の試み

石崎淳一*

Key word

思春期, 性行動, ピア・エデュケーション, 自己抑制
adolescence, sexual behavior, peer education, abstinence

I 問題と目的

東京都在住の高校生に対する縦断調査では, 2000年代の高校3年生の性交経験率は40%に達している(都性研, 2005)。1990年代の後半から日本で大規模な性行動調査を実施した京大の木原らの研究グループ(厚生労働省 HIV 社会疫学研究班)は、性交開始年齢の低年齢化や性関係のネットワーク化など、日本人の性行動の劇的な変化を実証的に示した(木原, 2006)。このような性行動の活発化はHIVを含む性感染症の流行をまねき、青年期の重大な健康リスクとなっている。この現状に強い危機感を表明している医学専門家からは、こうした性感染症の拡大に心理社会的な要因の関与が示唆されているが(木原ほか, 2004; 富永, 2005), 日本ではこれまでこのような青少年の性行動の変化に関わる心理学的な要因やその変化を調べる研究はきわめて少ない。

臨床心理学的には、性は人間存在を根本において「つなぐ」働きをもつものであると考えられ、

その「解放化」は人間の本質的なつながりを失わせる危険性があると思われる(石崎, 2005)。また、Freudの時代には心理的な課題として「性の抑圧からの解放」が考えられたのだが、情報化時代に生きる現代人はメディアなどを通して過剰な欲望の刺激に曝されており、むしろ「欲望の抑制」こそが心理的な課題となっている(町沢, 2003)。

一方、かつて性解放の先進国であった米国は、わが国とは対照的に1990年代を通して家族再建の方向に努力を傾け、性教育においても「Abstinence Education(以下A.E.)」を展開してきた。Abstinenceとは、「禁欲」を意味する言葉であり、禁酒や禁煙なども Abstinence であるが、ここでは特に性的な活動に対する節制を指し、心理社会的な側面を強調する意味で Sex Education と対置される。A.E.あるいは Abstinence-based Sex Education は、日本語では「(性的) 禁欲教育」「(性的) 自己抑制教育」などと訳すことができるが、筆者は青年期の性的自制のもつ自己管理(self-control)における積極的な意義を示すため

受理日 2008年4月16日

An Abstinence Education : The Effect of a Peer Program on High School Students

* 神戸学院大学人文学部人間心理学科 : Department of Psychology, Faculty of Humanities and Sciences, Kobe Gakuin University

に「性的自律教育」と呼んでいる（加久ほか, 2007）。すなわち, Abstinence には、Weber M がプロテスタンティズムの精神を「禁欲的エートス」と呼んだように、青年が将来の自分の目標の達成のために現在の自分をコントロールし勤勉に生きるという含意がある（富永, 2005）。

A.E.ではひじょうに多くのプログラムが開発されているが、その主要なメッセージは以下の2点である（Kirby, 2001）。①青年期における性的自己抑制には、人格成長のための大きな意義（メリット）がある。②HIV/AIDS を含む性感染症(STI) は深刻な医学的、心理社会的脅威であり、青少年は特にそのリスクが高い。したがって、結婚まで異性とセックスをしない（No Sex）ことが、身体的、道徳的に青年期のベストの選択であるとされる。人格教育（Character Education）の観点からは、性教育といわず「愛と結婚の教育と呼ぶべき」という主張（リコーナ, 2001）に、その立場が明確に示されている。米国では1990年代以降、公教育における人格教育をベースに性教育におけるA.E.が広く行なわれてきた（Divine et al., 2000）。欧米の保健医療の領域では、すでにHIV予防などという観点からこれまでの無作為化比較実験(Randomized Control Trial: RCT) を基準とする trial の効果を系統的にレビューする段階に進んでおり、Abstinence の推奨と性感染症(Sexually Transmitted Infection: STI) などの知識を提供するプログラムが HIV/AIDS 予防に対する生物学的、行動学的指標において有効であることが示されている（Underhill et al., 2007）。

しかし、これまでわが国では米国におけるA.E.についてはほとんど研究されてこなかった。そして、1990年代に日本では、米国でA.E.が始まる前に開発されたコンドームの使用率を高めることをプログラムの中心に構成する「避妊型」の性教育がおもに行なわれた。したがって、そこでは性的自己抑制に対するメッセージはきわめて弱い。筆者は、わが国でも臨床心理学的な立場から

A.E.の検討が求められると述べてきたが、本稿では、大学生とともに高校生を対象とするA.E.型プログラムを検討し実際に実施した結果について、その概要を報告することを目的とする。なお、プログラムの実施者が大学生という高校生に近い若者であるので、形式的にはピア教育（Peer Education）ということになる。A.E.におけるピア教育の有効性は認められている（Mellanby et al., 2000）。

II 対象と方法

1. 対象

A高校の3年生全員、8クラスに所属する273名（男子114名、女子159名）。

2. 方法

①セッティングとプレゼンテーション：2クラス約60名に対して2時間（100分）の間に大学生4名がA.E.型のプレゼンテーション（各約15分）をオムニバスで行なった。対象全体に対する各プレゼンテーションの後に、4つの小グループに分けてグループ・ディスカッションを行なった。同じプログラムを1日の午前と午後に各1回、4（2×2）クラスに対して行ない、これを2日間実施した。プレゼンテーションのタイトルは、「世界のHIV/AIDSの現状」「責任ある行動を——性感染症」「父母の愛」「男女が親密になること」である。

これらは、高校においては性教育・保健教育を担当する養護教員による家庭科に関連づけた出前授業と位置づけられ、プレゼンテーションの内容は、「家庭総合」の青年期のライフサイクルの課題に関連づけられた。

②評価の手続き：質問紙を使用した。これまでに性教育に関する教育・研究を実施してきた高校であるため、過去のデータと比較できるよう、以前の「性知識、性行動、性意識」に関する質問紙をもとに若干の変更を加えた。実施の約1週間前に事前調査を行ない、実施後に再び質問紙調査を行なった。

③評価尺度：

a [知識に関する質問] HIV/AIDS を含む STI に関する 8 つの知識について “はい・いいえ” の 2 件法で質問した。

b [行動に関する質問] 家族との会話の頻度、喫煙経験の有無と頻度、性交経験の有無と頻度について、それぞれ 4 件法で質問した。(会話の回答は、家族と日常 “ほとんど話をしない・あまり話をしない・わりと話をする・よく話をする”。また、喫煙と性交は “経験がありよくする・経験がありたまにする・経験はあるが今はしない・経験がない”。)

c [意識に関する質問] 高校生が性交することは容認されるか、不特定多数の人と性交することを個人の自由だと思うか、その他の質問を行なった。意識に関する質問項目のうちから、ここでは性交に関する意識を尋ねた上記の 2 つを報告する。ともに 5 件法で質問した。(回答は、“そう思う・ややそう思う・どちらともいえない・ややそう思わない・そう思わない”)。

d [その他の質問] ピア授業に対する高校生の評価を 5 件法で質問した。(回答は、授業が役に立ったか？ という問い合わせに対して、上の c と同じ)。

III 結果

1. 知識に関する質問の結果

8 項目の STI に関する知識を問う質問の平均点は、事前調査が 6.1 点であったのに対して事後調査では 7.1 点と全般的にかなり高い正答率となつた。成績の向上の変化において男女の差はなかつた。図 1 に STI に関する知識の質問項目の例として「性感染症と不妊症の関連」についての質問に対する事前と事後の正答率の変化を示した。

2. 行動に関する質問の結果

事前調査における喫煙の経験率は、男子 33.3 %、女子 20.8 % であった。また性交の経験率は、男子 37.7 %、女子 40.3 % であった。家族との会話においては、会話が少ない方の 2 つの回答者を合わせ

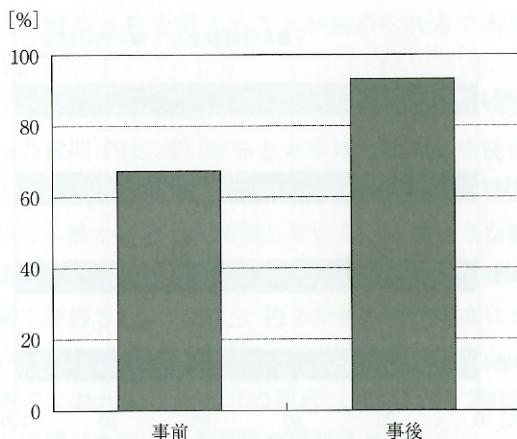


図 1 事前と事後の「性感染症と不妊症の関連」に関する質問に対する正答率

たものが、男子 35.1 %、女子 24.2 % であった。リスク行動同士の関連の有無を調べるために、喫煙経験の有無と頻度が性交経験の有無に与える影響について、また、家族の会話の頻度が性交経験の有無に与える影響について、事前調査の各項目データのロジスティック回帰分析を行なつた。その結果、性交経験のあることに対する喫煙状態の関連は有意で、喫煙の程度が増すことによる性交経験リスク（オッズ比）は 3.4 倍であった ($p < 0.001$)。一方、性交経験の有無と会話の程度との間には有意な関連を認めなかつた。図 2 に性交経験の有無と喫煙の有無および頻度のクロス集計の結果を示した。

3. 意識に関する質問の結果

「高校生の性交の許容」、「不特定多数との性交の許容」などの性意識に関する質問においては、その傾向に性差が見られたため男女別の結果を示した。「高校生の性交を許容するか」という質問に対して、男子では事前調査と事後調査に大きな変化がなかつた。一方、女子は、事前調査での肯定的回答（5 件法の回答の肯定的回答の群）が 61 % とかなり高かつたが、事後調査では 47 % に減少した。また、「不特定多数との性交は個人の自由か」という質問では、事後に男女ともにより否定的な方向に変化し、男子では事後調査で肯

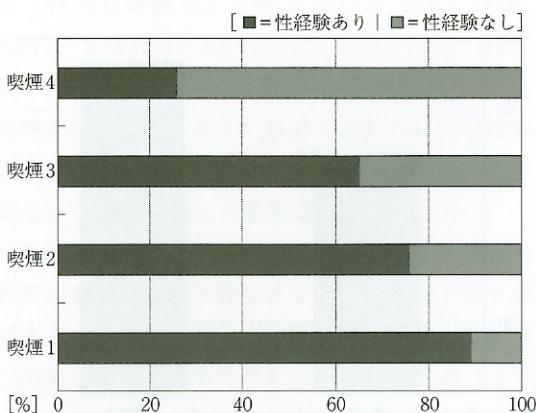


図2 性交経験の有無と喫煙経験の有無および頻度のクロス集計の結果（喫煙1=高頻度、喫煙2=中頻度、喫煙3=低頻度。喫煙4=未喫煙経験）

定・中間・否定の3群（5件法の回答を3つにまとめた群）が並び、女子では事前調査では肯定群が多かった（42%）のが、事後では否定群が多くなった（38%）。図3と図4に男女別の「高校生の性交の許容」および「不特定多数との性交の許容」に関する質問の結果を示した。

4. その他

ピア形式の授業に対する高校生の評価は、「とても良かった」が61%、「良かった」が28%で、肯定的な評価が約90%を占め、否定的な評価はわずか2%であった。

IV 考 察

大学生による高校生に対するピア形式の愛と性に関するA.E.型の特別授業を2日間計4回行ない、同時に高校生の性に関する「知識」「行動」「意識」に関する質問紙によって事前－事後の調査を実施した。

1. 質問紙調査の結果をめぐって

①STIなどの知識の伝達について：HIV/AIDSを含むSTIの「知識」に関する質問では、事前の調査で正答率が平均75%と比較的高かったが、事後の調査ではさらに成績が向上し、平均90%近い正答率となった。ピア形式によるSTIなどに関する知識・情報を提供した研究においても高

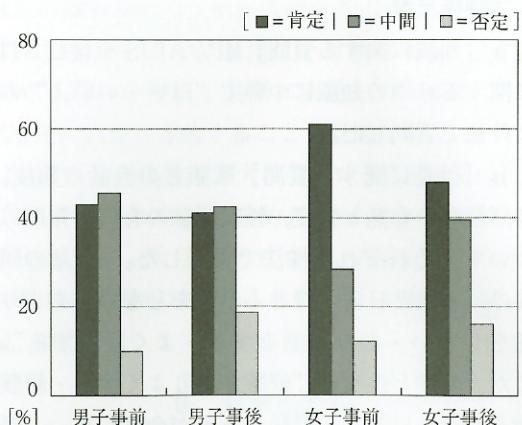


図3 「高校生の性交を許容するか」という質問項目に対する事前および事後調査の男女別の回答結果（5件法の回答を肯定・中間・否定の3群にまとめて示した）

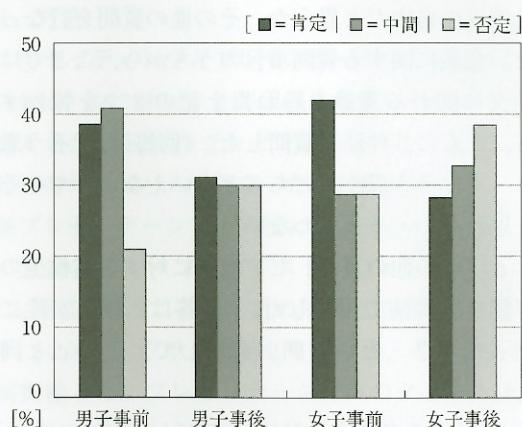


図4 「不特定多数との性交は個人の自由か」という質問項目に対する事前および事後調査の男女別の回答結果（5件法の回答を肯定・中間・否定の3群にまとめて示した）

校生などの受講者の成績は良好であったことがこれまででも報告されており（大家ほか, 2006）、STIなどに関する知識の伝達においてピア授業はかなり効果的であると考えられた。

②性行動と関連する行動について：喫煙と性行動という10代の健康リスク行動同士の間に強い関連を認めた。こうした点からは、健康教育の実施において複数のリスク行動の予防という観点や、すでにリスク行動を開始しているハイリスク群とそれ以外の集団とを分けて対応するという方法などが支持された。一方、これまで10代の若

者において家族内の高い会話の頻度は性行動を抑制することが繰り返し指摘されてきた（例えば、木原, 2006）が、本研究では確認できなかった。このことは今後の課題となったが、現在の40代を親の世代にもつ高校生においては、会話によって表される家族内の、とくに父母との親密さが必ずしも性行動の抑止に寄与しなくなっている可能性も考えられ、今後さらに追跡的に調べる必要があると思われた。

③性行動に対する抑制的意識について：日本人の性行動は1990年代以降に大きく変化したと考えられるが、このことは性行動に関する世代の差が大きいことからもわかる（木原ほか, 2004）。当然行動の原因となる意識の変化も大きく、2000年以降の高校3年生の意識調査で「高校生が性交すること」を容認することは80%以上にのぼる（都性研, 2005）。このような状況は今回のわれわれの調査でも同じような結果であったが、大学生のピア介入によって性意識に抑制的な方向への変化が見られたことは、日本の高校生がA.E.型の抑制メッセージに応えることができることを示唆する。したがって、当事者である高校生や大学生とともにA.E.を考えていくことが必要であると思われる。わが国においても河合（1996）は臨床心理学的な観点から、性教育においては客観的な知識の伝達が必ずしも教育的ではないこと、また性の「解放化」はわれわれにとって自己の解放というよりも性のもつ力に動かされた自己の喪失であることを指摘している。米国のA.E.は文化的にはキリスト教の影響が強いと思われるが、このような青年期の性的自己抑制がもつ意味を伝える

日本型のA.E.を考えることが求められるであろう。

④ピア形式の意義：事後調査におけるピア形式への質問では、約90%というほとんどの生徒が肯定的に評価しており、また実際の授業態度においても静かに熱心に聴講していた。このような聴講状態は高校の教員や教育委員会の担当者からも高く評価された。また、約半年後の追跡調査においても多くの生徒が「強く印象に残っている」と述べており、これまでの報告（渡部ほか, 2005）と同様ピア形式の有効性が確認された^{注)}。

2. 性的自律 (Abstinence) 教育の必要性

文部省（現・文部科学省）は1992年に性教育の見直しを行ない、1990年代以降10代の青少年に対してより積極的な性教育が行なわれたが、おもにコンドームの使用率の向上を目指すような避妊型のプログラムであり、性行動に対する抑制的なメッセージは弱いものであった。また、性教育においてピア形式のアプローチが用いられてきたが、これもおもにコンドームの使用法などを教授するものであったため、ピアの役割モデルとしての機能が逆に高校生などへの性交の容認のメッセージになった可能性もある。

しかし、10代の未婚の若者にとっての性行動の開始は、身体的にも心理社会的にも重大な健康リスクをともなうものであり、まずそのことを当事者に知らせるることは大人の責任であろう。また、A.E.の観点からあらためて鮮明になることは、青年期の性的自律 (Abstinence) は、自己中心的で衝動的な欲求を自己抑制（よく自己管理）することを通して、将来の永続的で安定した結婚生活の

注) なお、本稿では実施者の教育に関して詳しく述べる余裕がないが、これまでの一部の報告にもあるように、ピア形式は受け手に対する効果とともに実施者（例えば、本研究では大学生）にも心理的によい影響を与えることができる。したがって、たいへん有望な方法であるが、心理介入としては危険性も伴うため、すぐれた実施者の養成が重要な課題となる。本研究における大学生は、将来的に心理学的な知識や技術を生かしたいと考える心理学専攻の学生であったため動機付けが高かった。さらに本研究への参加は大学内のカリキュラムとは別の自主的なものであり、実施者は実際の介入に先立つ約1年前から筆者の研究活動に参加し、月1, 2回、1回に約2, 3時間の定期的な学習会に参加した。したがって、実際の介入のための準備教育の時間はのべ30時間を超えた。また、事前に当該高校の養護教員やその他の教員、助産師などが参加する研究会で2回にわたって発表し、介入に関する意見交換をおこなった。これまでのわが国の大学生による性教育に関するピア教育は、医学系・看護系大学の学生がほとんどであったが、本研究では心理学専攻の学生がピア教育の実施者となった。臨床心理学においてはピア教育に関わる蓄積も大きく、ピア形式によるA.E.のような健康教育において「どこで、誰を、どのように」養成するのかという問題は、今後の大きな課題である。

ための準備をするものであり (McDowell, 1993), 青少年が大人としてのアイデンティティを確立していくときに通過しなければならない, 困難だが意義深い人格成長の内なる闘いでもある (河合, 1996) ということである。

現代社会におけるポルノ商品の氾濫, あるいは出会い系サイトの携帯ツールを通じた流布などによる性行動の活発化は, われわれの社会の文化的な人間関係の紐帶が弱くなったことの原因とも結果とも考えられるが, いずれにしろ青少年の個人的また社会的な未来への可能性を考えるとき, 10代の性行動におけるノー・セックスという選択肢がもつ意味を説く必要があるであろう。人生において性をどのように取りあつかうべきなのかというテーマは現代社会における深刻な問題であり, 今日の性教育はさまざまな領域の専門家が協働して取り組むべき大きな課題であると思われる。

謝辞:本研究のピア・プログラムを実施した神戸学院大学の学生諸君（鶴之浦智仁, 上加世田浩尚, 漢那遼平, 渡裕美子, 柴田祥行）に感謝いたします。また調査にご協力いただいたA高校の生徒の皆さんと, 研究をサポートいただいた牧田利枝, 久郷智景両先生ほかの諸先生に感謝いたします。なお, 本研究は2006年度神戸学院大学人文学部研究推進費の助成を受けた。本研究の一部は, 日本心理臨床学会第26回大会(2007, 東京)で発表したが, 当日司会者の労をお取りいただいた明治大学の高良聖先生に感謝いたします。

文 献

Divine T, Seuk JH, Wilson A (ed.) (2000) *Cultivating Heart and Character : Educating for Life's Most Essential Goals*. Character Developing Publishing, North Carolina.
(上寺久雄監訳 (2003)「人格教育」のすすめ—アメリカ・教育改革の新しい潮流. コスモトゥーワン.)

- 石崎淳一 (2005) 青少年の性的活動における危機をめぐって. 臨床心理学 5-3;375-379.
- 加久はづ, 中山尚夫, 石崎淳一 (2007) 人間性教育読本—愛と性の尊厳. アートヴィレッジ.
- 河合隼雄 (1996) 大人になることのむずかしさ [新装版]—子どもと教育. 岩波書店.
- 木原正博, 木原雅子 (2004) エイズ問題が照射する日本社会の脆弱性. 世界 722;102-110.
- 木原雅子 (2006) 10代の性行動と日本社会—そしてWYSH教育の視点. ミネルヴァ書房.
- Kirby D (2001) Emerging Answers : Research Findings on Programs to Reduce Teen Pregnancy. The National Campaign to Prevent Teen Pregnancy, Washington DC.
- リコーナ, トマス (水野修次郎監訳) (2001) 人格の教育—新しい徳の教え方学び方. 北樹出版.
- 町澤静夫 (2003) ボーダーライン—自己を見失う日本の青年たち. 丸善.
- McDowell J (1993) The Myths of Sex Education : Josh McDowell's Open Letter to His School Board. Thomas Nelson.
- Mellanby AR, Rees JB and Tripp JH (2000) Peer-led and adult-led school health education : A critical review of available research. Health Education Research 15-5 ; 533-545.
- 大家さとみ, 栗原淳 (2006) 性教育におけるピアエデュケーションの短期的効果—高等学校での性教育の実践を通して. 学校保健研究 48;32-45.
- 東京都幼小中高心障性教育研究会編 (2005) 児童・生徒の性 2005年調査. 学校図書.
- 富永國比古 (2005) 泣きながら夜を過ごす人にも—現代人のセクシュアリティ, 性的トラウマ, 新しい性教育論. キリスト新聞社.
- Underhill K, et al. (2007) Systematic review of abstinence-plus HIV prevention programs in high-income countries. PLoS medicine 4; e275 (1471-1484).
- 渡部基, 野津有司 (2005) 我が国の学校における性・エイズ教育のピアエデュケーションプログラム開発の展望—中学生・高校生を対象としたプログラムの比較. 日本健康教育学会誌 13-2;68-76.